



『右詰めだって言ってるでしょ！』

---

もう何年も前のことです。

ある日のこと。工作中、どうしても気分が悪くなって、オフィスビル内にある健康管理センターに行きました。そこには産業医がいます。

頭がぼうっとして熱があるのが自分でも分かっていました。たぶん風邪でしょう。

薬をもらって今日は早く帰ろう。体力も気力もすでに尽きかけていました。

受付で診察してもらいたいと告げると、看護婦らしき白衣のおばちゃんが、まず問診票を書きなさいと言います。

「はい、これの太枠の中を書いて。社員番号のところは右詰めでね、いい？ 右詰めよ！」

「・・・あ、はい」

いま思うと、このときすでに、おばちゃん看護婦は不機嫌そうな様子でした。

紙を見ると、所属先、名前の下に社員番号を書く欄には四角いハコが並んでいます。

えーとえーと、うーん。

熱でぼうっとした頭をなんとか回転させ、ときどきため息をつきながら書き進めていきましたが、社員番号を書き終えたところで気づきました。

あ、左詰めになってる。

そこへさっきの看護婦さんが来ました。

「あんた！ わたし話を聞いてなかったの！ 右詰めってあんなに言ったでしょ！！」

わたしはもはや活動を放棄しつつある脳みそに、最後の糖分と酸素を送り込み、考え、そして言葉をしぼり出します。

「いえ、ちゃんと聞いてました」

とたん、おばちゃん看護婦が烈火のごとく怒り出します。

「んまあ！！ この子はウソまでつくの！！ 聞いてなかったに決まってるじゃない！ いいかげんにしなさい！！」

さらにたっぷり10秒かけて悪態を並べ、そして最後にプイと後ろを向き、背中から怒りオーラを噴出させながら受付の中へと戻って行ってしまいました。

えーっと・・・。だからちゃんと「聞いてました」って。

社員番号を書くとき、右から書き出すのは書きづらいので左から書くことにしました。そこでまず、書き出しの升目を決めるため、升目を数えたのです。そしたら7個ある。

あ、なんだ、自分の社員番号の桁数と同じだ。自分の場合は右詰めも左詰めも関係ないじゃん。社内には自分より桁数の少ない社員さんもいるのかな、重役さんなんかはそうなのかな、などと思いつつ、安心して左から順に書いていった結果、右の一升が空いてしまいました。

つまり自分は、熱のせいでしょう、升目の数を数え間違えていたのです。

おばちゃん、ウソはついていません。ちゃんと聞いていたのです。ただ数え間違っただけです・・・。

そう説明しようと思ったのに。

ひとの話は最後まで聞いてください。

そもそもなんで社員番号を書く欄が8桁あるの？ この問診票の作りのほうがおかしいんじゃない？

それよりなにより、自分、病人なんですけど。もう少し、いたわってもらえないものでしょうか。

健康管理センターですよ、そこ。看護婦さんですよ、あなた。

一気に体温が1℃くらい上がったような、熱い体験でした。

## 『Tヨタ自動車さんには憤っています』

---

これはいつか、どこかに残しておかねばならんと思っていた話を、ここで書いておきます。

今から数年前、平成16年の9月、ネットTヨタ系のある車を買いました。

その際、ディーラーに勧められて『ネットメンテナンスパスポート』なるサービスに加入しました。

「お車に必要な点検とメンテナンスをパックにして特別料金で提供するネット東京のサービスメニューです。個別で点検・メンテナンスを行うよりも、断然お得です」だそうです。

定期点検や初回の車検などがパックになっているので、自分で気にする必要がなくラクだし金額的にもお得だとお店の方が勧めるので、そんなに言うなら、とワリと安易にお願いしてしまいました。

がしかし、そいつが悲劇の始まりだったのです。

購入してしばらく、1ヶ月無料点検、6ヶ月無料点検と続きまして、平成18年9月に2回目の12ヶ月点検を無事に終え、そこまでは順調でありました（あたりまえか）。

ところが。

平成19年9月。

ほぼ同時期に購入したわたしの親の車が車検だというので、うーん、たいへんだねまたお金かかるね、なんて話をしておりましたが、そういやあんたの車は大丈夫なのかいと水を向けられ、一瞬ハタと考えました。

いや、自分はTヨタさんにみんなお任せしているのでなんの心配もないはずだー。

そもそも、そのために（自分で考えなくていいように）先にお金出して「パック」にしたんだもん。必要なら必要な時期に、Tヨタさんからお知らせのDMがくるんだもんね。

あなた（わたしの親）の車は軽自動車なので車検が早いんでないかい、ケイも良し悪しなんだねえ、がははは、なんて、自分は大船に乗ったつもりでのん気に考えておりました。

そしてそのままなにごともなく月日は過ぎて。

平成20年10月。

某ガソリンスタンドで給油していたときのこと。

フロントガラスを拭いていたバイトのいちゃんが、ぼそっと

「あの一、お客さん、この車、車検、切れてないですかね。いや、ここのシールが今年のなんで、ちょっと気になって」

見ると、確かに車検を示すシールが古い、みたい。

はあ？

けどそんな馬鹿な、ね。

天下のTヨタさんに任せてあるのだから間違いのあるはずがない。

違っているのはこっちのほうだよ、きっと。僕らになにか勘違いがあるのだ、そうに違いない。

とは思ったけど、しかし気になるので、すぐにネットTヨタさんに電話して確認してみました。

まさかね、なんて思いつつ。

「えっ、いや、はあ、じゃまあ確認してみます」「すみませんね忙しいところ。気になったものだから、はは」

1時間後。

折り返しの電話がありました。

「いや、あの、19年9月に入庫の記録があるのですが出庫の記録がないのですよ。ちょっとおかしいですね。うーん、なぜかは、うーん、ちょっと・・・わかりませんねえ」  
わかりやすく言えば、わたしの車の車検はスルーされていたようです。なぜかは未だにわかりませんが。

そしてその後も、ネッツTヨタさんは、悪かったとはひとつも言いませんでした。

「入庫の記録があって出庫の記録がない」・・・どんな方便なのでしょう。未だに意味不明です。

ノベルティのひとつもくれません。悪いと思っていないのかまったく謝罪の気持ちはないようです。

その後も、なんの対応も補償もしてくれないままです。

いま、わたしの持っている『Netzメンテナンスパスポート』の冊子は、いまでも「30ヶ月目のあんしん点検」と「36ヶ月目の車検」は空欄で担当者サインがありません。

あんのお、これって「契約違反」じゃないんですかあ？

それからわたし、Tヨタさんのせいで1年以上「車検切れ」の車に乗ってたんですけど、ひどくないっすか？自賠償の切れた車に乗ってたわけですよ。その間、なんかあったらとんでもないことになってましたよ。

（知り合いのTヨタ系の業界者に聞いたら、『結局そのところは最後は自己責任だから』と言われました。ヲイ！それじゃそのパックに入る意味無いじゃないですか！）

なんという傲慢な商売スタイルなのでしょう。

自動車業界ってヒドイ！（Tヨタだけ？）

もう二度とTヨタ車には乗るもんかと、心に決めたわたしでありました。

それにしても車検切れだった一年ちょっとの間、事故がなくてよかったあ・・・。

## 『ファーストフード店でのなし』

---

もう7、8年ほど前になろうか。

少々古い話で恐縮だが、行きがかり上お付き合いいただきたい。なんの行きがかりなのかは自分で振り返ってもらいたい。

暑い夏の日の会社帰り。その日の仕事はかなりハードで、体力的にも精神的にもいっぱいはいっぱいぱーいの状態であらゆることになって大手チェーン店である牛丼屋のドアを開けた。

まずは店内の自動販売機で食券を買う。

この時点ですぐに吉野家ではないなと気づいたあなたは牛丼屋常連ですな。牛丼屋初段を認定する。

知らない方のために解説すると、ほとんどの牛丼チェーンには自動券売機があるが、吉野家にはない。つまり食後の清算である。なぜかという、吉野家社長曰く「お客様のお帰りの際に対面で接して“ありがとうございました”とこころをこめてお声かけする機会を逃したくないから」だそうである。うーん、いい話だ。がんばれ吉野家。

閑話休題。

おなかはそれなりに減っているのだが食欲はない。カバンがなんとなくいつもより重い。とにかく早く帰宅して寝たい。いろいろめんどくさい。

というわけで、一番早く出てきてボリューム的にもそこそこ軽いと思われる「牛めし（並）」のボタンを押す。いわずもがなだがこの店の主力商品である。「牛めし」というメニュー名で店もバレてしまったかも知れないが気づかないふりをしてかまわず進めることにする。

バイトの店員さんに注文を提示したあと、携帯なんぞいじりながらカウンター席に座って待つこと約2分。

お待ちどおさまと言われ、携帯から目を離して出てきた注文品を見て啞然。心底、マジでびっくりした。

それは、自分が知っている「牛めし（並）」とは似ても似つかぬものであった。

基本的根本的決定的におかしいのは「牛肉」がほとんど見あたらない。牛めしなのに。牛丼屋の「牛めし」なのに。

その物体にあえて呼称を与えるのであれば、まさしくそれは「たまねぎめし（並）」であった。通常その店の牛めしは、牛肉が8割でたまねぎが2割ほどの割合でどんぶりごはんののっかっているのであるが、そいつはまったく逆であった。たまねぎがどんぶりのほとんど全面を覆いつくしていた。8割。いや、それ以上あった。とにかく茶色がほとんどなく一面が真っ白だった。その日の疲れがいきなり倍増した瞬間であった。

今思うと写メ撮っとけばよかったよ。それはそれは貴重な写真になったのに。くそっ。

その一件以来、くだんの牛丼店には一度も足を運んでいない。

M屋の南行徳店には。

あ、書いちゃった。でも事実だしな。

ああ、M屋さん。

カレーのほうは大丈夫なのだろうか。余計なお世話か。

## 『歯磨き粉とはなにものぞ』

---

朝に歯を磨くことが多い。

夜派、もしくは朝夜派も少なくないと思われるが、自分の場合は夜は吞んでくれてへべれけになっているので歯を磨く状況にないのである。

夜はアルコール消毒なのである、などというオヤジ風ギャグはちっとも面白くない上に苦笑いか愛想笑いしか引き出せないなのでここでは差し控えたい。

今日は声を大にして主張したい。

じつは自分、幼少のころから30年以上もの間、ずっとライオンに騙されていたのである！  
ここでいうライオンとはもちろん、おはようからおやすみまでの、なにがでるかなの番組スポンサーの、歯磨き粉を製造している、あのライオン株式会社である。

最近は見かけないが、30年以上むかしライオンはこんなコマーシャルを放送していた。

「このデンターホゲホゲで歯と歯の間の歯垢を分解！」シャキーン！

白衣の外国人男性が顕微鏡で見たムシバイキンくんの写真（画面右下にちっちゃく「イメージ図」とある）を棒で指している。コメント終了と同時にバイキンくんが粉々に爆発！

同じく白衣で眼鏡のブロンド女性がデンターを持って大きくうなづく。

これを見ていた幼い自分は「そうかあ、デンターホゲホゲにはムシバイキンをやっつける力があるんだ」と、まったく疑いなく頭から信用してしまったのだ。

今思えば最悪の解釈である。

それから自分は毎朝、歯にデンターホゲホゲを塗りたくるようになっていたのである。

磨いていないのだ。ブラシで磨くんじゃなくて、歯磨き粉を歯に塗るのである。

そうしていれば、デンターくんがムシバイキンを退治してくれると信じて。あのコマーシャルのイメージように。

不思議なのは、それでも2年に1回くらいは虫歯になってしまうことであるが、人間食事をしている以上はある程度仕方のないことだとあきらめていたところがあった。

時は流れ流れて、36歳のある日。

2年ぶりの歯医者さんで、凝りもせずまたブラッシングのアドバイスを受けていたとき。

歯科助手さん曰く「こうやって歯ブラシのカドのところを使うと効率よく磨けますよ」なんて。

「なるほどねえ。でも自分、ちゃんと歯磨き粉を塗ってるんで大丈夫だと思いますよ。・・・、あれ？」

この発言を聞いて歯科助手さんが固まった。歯の石膏ではなく彼女自身が。

えっと、あれ、歯磨き粉でいいんじゃないの？ だめなの？ じゃあ、歯磨き粉ってなにしてくれるの？

返ってきた答えに衝撃を受けた。2秒考えた彼女の答えが「んー、まず爽快感」

なにーっ！ わたしは爽快感のために30年もの間、歯磨き粉を塗っていたわけではないぞー！！



その瞬間、自分はすべてを理解したのである。30年間は走馬灯のように頭の中を過ぎていったのである。

ライオンめー、わたしの治療した歯を返せー！！

それに歯磨き粉ー、なぜペースト状なのに「粉」っていうのー！！

## 『ドンキーでのびっくりな出来事』

---

ご存知ハンバーグの全国チェーン店である。

某日夕方、お昼抜きで、ひとりでお店に入ったのである。ペコペコである。もうペッコンペッコンである。

2010年夏、キャンペーンをやっていた「ガリバーバーグ」はご存知だろうか。

400グラムの超ビッグサイズのハンバーグ！おとこらしい！（でもちょっとコレステくんや塩分が心配なのだけど）

注文をして3分くらいしたころ、となりの席に男性が案内されて着席した。

白髪と声の感じから、60歳前後だろうか。

メニューを見て「これください」と指をさし、だんていにご注文をされていたのであった。意味無くかっこいい。

さらに10分後。

まずとなりの男性の注文品がデリバリされてきたのである。あ、なんの問題もありません。いいですよそんな、料理の細かな順番くらい。

出てきたのはミートソーススパゲティ。

へえ、ハンバーグ専門店ですらめずらしいものを注文しているなと思ったら、なにやらスタッフともめている。どうやら自分の注文した品じゃない、とのことらしい。

その男性、結局怒って席を立ち帰ってしまったのである。おとこのこらしい。

ふとみるとレジ付近でバイトのおにいさんが店長に、コトの顛末を報告しているようだ。

あの客の指さしたところがわかりづらくて、なんて言っているのかどうか。

さてまたさらにその2分後。

自分の注文品らしきものが出てきた。

そいつが「ガリバーバーグ“ディッシュ”」つまりご飯付きワンプレート。

あの、違いますけど。自分が頼んだのは「ガリバーバーグ（ステーキ）」ですけど……。はっきりそう注文で言いましたよね。おにいさん？

しかし気の弱い自分は文句も言えず、がんばって全部食べたのであった。くすん。おとこのこらしくない。

だってペッコンペッコンだったんだもん。

ドンキー、ちょっとまずいことになっとりゃせんか？

## 『ああラーメン』

---

最良にしている中華料理屋がある。いや、最近までよく通った店であった。  
以前にもご紹介したことがあるかもしれないが、いま一度ご説明さしあげたい。

自宅から徒歩5分。片側2車線で比較的交通量も多いバイパス沿いに、その店はある。老年のご夫婦で経営されているらしく、街の中華屋さんを絵に描いたような小ぢんまりとした古びた店である。

決してきれいとはいえないが、人当たりのいいおばちゃんとお無愛想だが腕の確かなおじちゃんが切り盛りする、ごく普通の店である。

常連さんも多い。

肉体労働のおっさんたち。地元で不動産関係の仕事をしているらしい中年夫婦。マスターと、競馬の話しかしないモッチャンと呼ばれる白髪男性。なにを生業としているかまったくわからないが毎日新宿に出ているらしいケバいおばちゃん。夏でも長袖を着るサングラスの若者。そして自分。

ほんとに普通なのかすでに怪しくなってきたが、それでも見た感じ、普通なのである。

ともあれ、味は間違いない。

特に野菜ラーメン（塩味）は絶品で、毎日売り切れ必至とのことだ。

その証拠とばかりに、グルメレポーターのイシちゃんこと石塚氏がマスターと並んでピースをしている写真がカウンター上に飾られている。よくみると写真中央に切り取った跡のようなものが伺えるが気のせいだろう。左右の背景も若干ちぐはぐだがあくまでも気のせいである。

数年前には中華の鉄人陳健一もお忍びでご試食にいらっしゃったとされるが、真偽のほどは定かではない。

厨房に「龍門さん江、秋誌篠宮殿下」と書いたサイン色紙が飾ってあるが、最近ではもうだれもツッコまないことになっている。サイン色紙の隣には「モンドセレクション2009金賞」と毛筆で書かれた賞状が額にかけられている。やりたい放題である。

そのかわり、店内どこを見渡しても「飲食店営業許可証」が見当たらないのが最近気になっている。

先日、カウンターでラーメン半チャーハンセットを食していたときのことだ。

目の前のザル籠に盛ってあったグレープフルーツに取り付き動く影を見た。瞬間、見てはいけなかったと気づいたが遅かった。アリエッティよりさらに一回り小さな、親指の爪ほどの大きさの薄茶色の物体。ひげが2本、足が6本。とてもゆっくりと、堂々と、ここは昔から俺の家だと言わんばかりの態度でグレープフルーツに這いつくばっていた。

自分はラーメンをあと一口残し、ゆっくりと店をあとにした。

なぜか涙が止まらない。

マスター、これからも元気でやってくれ。

## 『おつり事件』

---

またまたラーメン屋の話で恐縮である。

よくよく自分は中華料理屋にお世話になっているものだとつくづく思う次第である。

いや、ほんにつくづくである。

N駅の北側の出口をでてロータリーを渡ると、二線路通りと呼ばれる狭い路地がある。

MクドナルドやSターバックスなどのお店と並んで、そのラーメン店はある。

開店当初は行列ができたという注目の人気店であったが、すでにその面影はなく、周囲に溶け込むようにひっそりと佇んでいる。むかしは店のホームページもあったが、現在は閉鎖されている

。

5年ほど前になろうか。

土曜日の午後3時ころ、忙しくて昼食を抜いていた自分はこの中途半端な時間に急にラーメンを食したくなり、初めてこの店に入った。

以前から、真っ黒いスープで背油たっぷりのわりには意外にあっさりでおいしいとの前評判を聞いていた。真偽は不明だが、京都で大人気の店の暖簾分けだとのうわさもあったので期待も大きい。ちょっとどきどきである。

そんな時間だからか、客はだれもいない。自分ひとりである。

味はまあ、うーんと、悪くなかった。というか、実はいまとなってはまったく印象にない。

なぜなら、その後に起こった出来事があまりにも衝撃だったからである。これが「おつり事件」である。

食べ終わると、当然ながら出入り口付近のレジで会計をおこなう。

600円です、といわれて財布から千円札を取り出して渡す。こちらはまったく油断している。無警戒である。

がしかし、見るからに気の抜けた頭の悪そうなサラリーマンを捕らえたレジのにいちゃんのウラの仕事は、ここからが素早い。

「はい、こちらおつりになりますー、ありがとうございました、またよろしくどうぞー」

さっと自分の手におつりを握らせ（レシートはもらえなかった）入り口のドアをわざわざガラガラと開けてくれて軽く自分の背を押して表へといざなう。とととと自分が表通りへつんのめると同時に背中ドアはピシャッと閉まった。

はあ、なんともせっかちな店だな。

と思いつつ、歩き出しながら右手の中のおつりを見ると100円玉が3枚。は?! やられたっ!

N市駅前二線路通りにある『〇龍』はそういう店である。つまり、うまいとかまずいとか以前の問題なのである。「豊」でもなんでもないのである。

みなさんも、もし入るのならそのあたりを踏まえたうえでご来店いただければと思う。食べに行くな、とはあえていわない。

ラーメン人生、まったくもって、つくづくである。

## 『バス停？』

---

それはアブラゼミの甲高い鳴声で頭が痛くなるような、暑い夏の日の午後のことだった。ボクはひとり、N駅行のバスを待っていた。

片側1車線の、どこにでもある田舎道だ。

バス停には、古くてところどころペンキがはげかけているベンチがひとつ、申し訳なさそうに置かれている。

近くに日差しを遮るものはなく、またその日は雲ひとつない晴天で、南の空で大威張りしている太陽が憎らしいほどまぶしかった。

バスの来る方向をながめると、道路の先のマンションがゆれて見える。帽子をかぶってくればよかったと思ったがいまさらどうしようもなかった。

目の前をすずめが横切っていく。暑さに追われ、逃げていくかのように林のほうへ飛んでいった。

首筋を大粒の汗が流れていく。

しかし、ハンカチを出す動作がまた汗を呼びそうに動けなかった。ボクはただじっとバスの来る方向を祈るように見つめていた。

ふと周りを見回してみると、バス停を10mほど離れたところに電柱があるのに気づいた。急いで、でもゆっくりと電柱の影に入る。生まれていちばん、日陰のありがたさに感謝した瞬間だった。

バスが来た。

乗客はあまり多くないようだ。よかった。座れそうだ。駅までの20分あまり、車内のエアコンで身体を冷やし、ゆっくりさせてもらおう。

結局、ポケットからハンカチを取り出して、首筋の汗を拭きながらバス停に向かう。

5秒後、バスとボクはバス停で出会う、はずだったのだが、バスはスピードを保ったまま、停留所の存在を無視してそのまま目の前を通り過ぎていった。

ボクは右のうなじをハンカチで押さえたまま、走り去っていくバスのおしりを見つめながら呆然と立ち尽くしていた。

暑い夏の日の午後のことだった。